

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月11日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21792298

研究課題名（和文） 軽度発達障害児の療育支援体制の充実にむけた活動評価指標の開発

研究課題名（英文） Development of evaluation index of improvement of health care system for child with mild developmental disorder

研究代表者

岩瀬 靖子（IWASE SEIKO）

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：20431736

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、軽度発達障害児の療育支援体制の充実にむけた活動評価指標を開発することである。軽度発達障害児の療育体制の実践事例を詳細に調査し、支援体制の充実にむけ、保健活動の根拠の明確化および保健活動の今後の方向性を導出する活動評価指標を開発することを目指した。軽度発達障害児の療育支援体制づくりに関する保健活動に取り組んだ保健師3名を対象とし面接による実態調査を実施した。結果より、軽度発達障害児の療育支援体制の充実にむけた活動評価として、6局面から構成される指標が見出された。指標の有用性の検討は、今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：The study aim was to develop the evaluation index of improvement of health care system for child with mild developmental disorder. The method was to research public health nurse's practices in improvement of health care system for child with disorder. The objectives were three public health nurses. Based on results, evaluation index which is consist of six aspects were found. Usability analysis for these index is an issue in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・老年看護学

キーワード：軽度発達障害児、地域看護、療育支援体制、保健師、活動評価指標

## 1. 研究開始当初の背景

発達障害とは胎生期を含めた発達期に、さまざまな原因が作用して、中枢神経系に障害が生じた結果、認知、言語、社会性および運動などの機能の獲得が障害さ

れる状態である<sup>1)</sup>。なかでも軽度発達障害という用語はわが国で近年用いられるようになった用語であり、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群、

高機能自閉症、特定不能の広汎性発達障害)の包括概念であると言われている<sup>2)</sup>。

これらの障害は認知や行動、社会性、コミュニケーションの障害が特徴であることから、乳児期には気づきにくく集団生活が始まる幼児期に各々の発達障害の中核症状に最初に気づかれることが多い。そのため早期支援の必要性が示唆されているが、外見上の特徴や極端な発達の遅れが認められにくく早期支援の機会に結びつきにくい問題がある<sup>3)</sup>。

これらの軽度発達障害に関わる社会性やコミュニケーションの問題、障害のとりえにくさの問題は、子どもとその家族にとって様々な健康問題をもたらす障害の診断が確定する以前から子どもとその家族が生活を営むうえで大きな影響を与えていると考えられる。

2005年に施行された発達障害者支援法によると、これまで法制度の谷間であった発達障害者に対する支援について、発達障害の早期発見と生涯発達支援の施策、各都道府県の発達障害支援センターの役割などが明記され、国や自治体の責務であることが示されている。このように、発達障害者とその家族の生活の営みについて生涯を通し支える療育支援体制の充実、今後ますます検討すべき課題であると言える。

療育支援体制において保健師は、乳幼児健康診査や各種母子保健事業を通して、障害が疑われる以前から子どもとその家族のニーズを早期に受け止めることが可能な立場にあり、だからこそ、早期から継続的な支援を展開していく役割があると考えられる。さらに公衆衛生を担う機関に所属する立場として、療育を必要とする子どもに対し、必要な支援が受けられるよう地域における療育支援体制の充実に向けた保健活動を展開していく必要がある。

国内における軽度発達障害児への保健師による支援に関連する研究動向をみると、保健師の支援技術を明らかにしたもの<sup>4)</sup>、さらに支援技術の構造を明らかにした研究<sup>5)</sup>が報告されている。しかしながら、療育支援体制の充実における評価方法に着目した研究は見受けられなかった。

このような背景を踏まえ、療育支援体制の充実において活動を評価し、今後の方向性を見出していくうえで根拠となる評価指標を検討していく必要性が高いの

ではないかと考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、軽度発達障害児の療育支援体制の充実に向けた活動評価指標を開発することである。

療育支援体制を充実させていくためには、軽度発達障害児とその家族の支援ニーズや社会情勢の変化に伴う影響を踏まえ、絶えず療育支援体制を刷新し発展させていく保健活動が重要であると考えられる。そのためには、経年的に活動評価を行っていくことが、地域における療育支援体制の充実において重要な基盤になると考えられる。

従って、本研究では軽度発達障害児の療育体制の実践事例を詳細に調査し、支援体制の充実に向け、保健活動の根拠の明確化および保健活動の今後の方向性を導出する活動評価指標を開発することを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象

軽度発達障害児の療育支援体制づくりに関する保健活動に取り組んだ保健師を対象とし面接による実態調査を実施し、療育支援体制における保健活動に関する実態を明らかにし、活動評価指標の試案を作成する。

### (2) 対象の選定方法

対象の選定にあたっては、地域背景・療育支援に関する社会資源状況の違いを考慮し3事例程度を選定し、対象となる保健師の研究協力の同意を得たうえで、保健活動について実態調査を行う。

### (3) 調査方法

実態調査は、研究者が直接現地に出向き対象保健師に対して半構成面接による方法を用いて実施する。

### (4) 調査項目

活動の目的、内容、もたらされた成果(支援体制の構築)、活動における保健師の評価方法(評価内容・評価時期・評価指標)

### (5) 分析方法

各事例の活動内容ともたらされた成果(どのような支援体制が構築されたか)について簡潔な文章で記述する。どのような活動が、成果と関連があったのか関係性を分析する。以上より、支援体制づくりのプロセスにおいて活動を評価する指標を考察する。

(5) 倫理的配慮

1) 研究参加の任意性の確保

研究を実施するにあたっては、研究対象である保健師および当該保健師の所属所の長、関係機関の長のそれぞれに研究の目的、方法について十分に説明を行ったうえで研究協力の同意を得た。

2) 匿名性と守秘性の確保

本研究によって知り得た情報の取り扱いには十分に配慮し、研究結果の公表に関しては、個人や固有名詞など個人が特定される表現方法に留意することを約束した。

4. 研究成果

(1) 調査対象と活動の概要

調査対象は3事例であった。調査対象とした活動の概要を表1に示す。

表1. 調査対象者と活動の概要

調査対象事例	事例1	事例2	事例2
活動概要	5歳児健康診査の立ち上げ	乳幼児健診後の発達事後フォロー教室の立ち上げ	乳幼児健診後の発達事後フォロー教室の立ち上げ

(2) 活動によってもたらされた成果と関連のある活動内容 (全体分析結果)

活動によってもたらされた成果と関連のある活動内容の分類整理を行った。全体分析結果を表2に示す。

表2. 活動によってもたらされた成果と関連のある活動内容 ※アルファベットは成果、また、丸数字は関連のある活動、カッコ内は事例を示す

A. 部署を超えた連携と関係機関の共有、協働した支援体制の構築
①一貫した支援を行うことを意図し、支援関係者間で情報を共有し支援の方針を統一した(事例1)(事例2)(事例3)
②児への個別支援の方向性を検討するために支援関係者と協働する(事例1)
③支援の輪が広がりやすくなるように、所属越えて関係者を参集した(事例1)(事例2)(事例3)
④地域へのつながりをつくることを意図し、福祉分野で行っていた継続支援の場に保健師が意図的に関わりを持った(事例3)
B. 保健事業展開のための基盤の構築
⑤事業を展開するための予算確保を行った(事例1)
⑥前年度の活動実績を上層部に根拠として示すことで予算が拡大できた(事例2)
C. 事業の評価・改善(PDCAサイクル)を常に行う仕組みの構築
⑦当初の目的がぶれないように、支援関係者(保健師以外の他職種含む)の見方を取り入れ検討する場を定期的に設ける(事例1)(事例2)(事例3)
D. 事業同士が有機的に機能する体制の構築
⑧各事業の対象を支援継続の要因別に整理したことで、事業同士のつながりが強化された(事例2)
⑨本事業の成果だけではなく市町全体の支援体制を常に検討することで本事業の果たすべき目的を明確にする(事例1)
E. 支援関係者が所属する施設の支援体制の充実
⑩保健事業の実績を根拠資料として提供することで、関係者が自組織の支援員の増員などの要求根拠として活用できるように工夫した(事例1)
F. 保健事業に関わる保健師の援助資質および意欲の向上
⑪新任者を意図的に事業に関わるようにし、事業の場を現任教育の場としても位置付けていく仕組みを作った(事例3)
⑫意図的に複数の保健師が事業に関わるような体制をつくり、個別支援の方針を保健師間で協議できる仕組みを作った(事例2)(事例3)
⑬意図的に保健師の事業担当をローテーションすることで、保健師全員でフォローする体制を作った(事例2)
⑭事業担当をローテーションすることで、保健師自身の地域全体を見ていく視点や事業を創造・発展させていく面白みを感じられるような仕組みを作った(事例2)(事例3)

活動によってもたらされた成果は、A～Fの6項目が確認できた。以下、もたらされた成果と関連のある活動内容を示す。

**A. 部署を超えた連携と関係機関の共有、協働した支援体制**、に関連のあった活動は、①一貫した支援を行うことを意図し、支援関係者間で情報を共有し支援の方針を統一した、②児への個別支援の方向性を検討するために支援関係者と協働する、③支援の輪が広がりやすくなるように、所属越えて関係者を参集した、④地域へのつながりをつくることを意図し、福祉分野で行っていた継続支援の場に保健師が意図的に関わりを持った、が含まれた。

**B. 保健事業展開のための基盤の構築**、に関連のあった活動は、⑤事業を展開するための予算確保を行った、⑥前年度の活動実績を上層部に根拠として示すことで予算が拡大できた、が含まれた。

**C. 事業の評価・改善（PDCAサイクル）を常に行う仕組みの構築**、に関連のあった活動は、⑦当初の目的がぶれないように、支援関係者（保健師以外の他職種含む）の見方を取り入れ検討する場を定期的に設ける、が含まれた。

**D. 事業同士が有機的に機能する体制の構築**、に関連のあった活動は、⑧各事業の対象を支援継続の要因別に整理したことで、事業同士のつながりが強化された、⑨本事業の成果だけではなく、市町全体の支援体制を常に検討することで本事業の果たすべき目的を明確にする、が含まれた。

**E. 支援関係者が所属する施設の支援体制の充実**、に関連のあった活動は、⑩保健事業の実績を根拠資料として提供することで、関係者が自組織の支援員の増員などの要求根拠として活用できるように工夫した、が含まれた。

**F. 保健事業に関わる保健師の援助資質および意欲の向上**、に関連のあった活動は、⑪新任者を意図的に事業に関わるようにし、事業の場を現任教育の場としても位置付けていく仕組みを作った、⑫意図的に複数の保健師が事業に関わるような体制をつくり、個別支援の方針を保健師間で協議できる仕組みを作った、⑬意図的に保健師の事業担当者をローテーションすることで、保健師全員でフォローする体制を作った。⑭事業担当をローテーションすることで、保健師自身の地域全体を見ていく視点や事業を創造・発展させていく面白みを感じられるような仕組みを作った、が含まれた。

### (3) 活動評価指標の検討

前述の(2)で整理した、活動によっても

もたらされた成果と関連のある活動内容を基に、軽度発達障害児の療育支援体制の充実に向けた活動評価として、《1. 支援関係者間で協働した支援体制づくりを評価するための指標》《2. 活動を展開する基盤づくりを評価するための指標》《3. 事業の評価・改善を常に行うための指標》《4. 事業同士の有機的な機能を評価するための指標》《5. 支援関係機関の支援体制の充実に評価するための指標》《6. 保健師および支援関係者の援助資質の向上を評価するための指標》の6局面から構成することができると考えられた。(表3)

これらの指標の有用性についての検討は、今後の課題である。

表3. 活動評価指標

1. 支援関係者間で協働した支援体制づくりを評価するための指標
①一貫した支援を展開するため、支援関係者間で情報を共有し支援の方針が統一されているか
②支援関係者と児への個別支援の方向性が検討されているか
③支援関係者で意見を共有できる場があるか
④関連分野で行われている継続支援の状況が把握されているか
2. 活動を展開する基盤づくりを評価するための指標
⑤事業展開の予算確保が図られているか
⑥上層部の事業への理解が得られているか
3. 事業の評価・改善を常に行う体制を評価するための指標
⑦支援関係者間（保健師以外の他職種含む）で定期的の方針を検討しているか。
4. 事業同士の有機的な機能を評価するための指標
⑧事業対象は適切であるか
⑨市町全体の支援体制の中で本事業の果たすべき目的が明確になっているか
5. 支援関係機関の支援体制の充実に評価するための指標
⑩関係機関の関係者が保健事業の成果を活用できているか
6. 保健師および支援関係者の援助資質の向上を評価するための指標
⑪保健師間で事業の目的や支援方針、方向性を協議できる場があるか
⑫保健師が活動を推進する意欲を感じられているか

## 参考文献

- 1) 太田昌孝: 発達障害をどうとらえるか, こころの科学 73, 14-19, 日本評論社, 1997
- 2) 鈴木周平: 幼児期の軽度発達障害～その特徴、難しさ～, チャイルドヘルス Vol.7 No.7, 4-7, 2004
- 3) 根来あゆみ他: 軽度発達障害の主観的育てにくさ感 母親への質問紙調査による検討, 発達97号, 13-18, 2004
- 4) 都筑千景: 援助の必要性を見極める—乳幼児健診で熟練保健師が用いた看護技術, 日本看護科学学会誌2(2), 2-12, 2004
- 5) 中山かおり他: 就学前の発達障害児とその家族に対する保健師の支援技術構造の明確化—支援の開始から保護者の障害受容までの支援に焦点を当てて—, 日本地域看護学会誌 Vol. 11, No. 1, 59-67
- 6) 子どもと家族を支える「ネットワークング」づくり: 田中康雄, 保健師ジャーナル Vol. 64 No. 10, 882-887, 2008

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)  
該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岩瀬 靖子 (IWASE SEIKO)  
千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号: 20431736

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし